

## 前回までのあらすじ

流遠るしおやみひめは地元の小学校に通う、普通の小学六年生の女の子。

今年の夏、ひよんな事から知り合った高校生・橘たちばなアサトに片想い中。

謎の少女・ツバキと出会い、彼女を救うために、やみひめは〈機獣少女きじゅう〉となった。危機を脱したものの、事態は収拾していない。そこで、やみひめはツバキに協力を申し出る。

ツバキの敵である〈カタストロ〉を倒すため、彼女と暮らす事になったやみひめは、休日を利用し、生活用品を買うべくショッピングに出掛けた。そこで荷物持ちという口実で呼び出したのは、やみひめの想い人であるアサトだった。

ツバキも交えた束の間の時を過ごし、やみひめはアサトへの想いを再確認する。

——『妹』でなく、『恋人』として彼の隣に並びたいと。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL XXXXXXX**

夕暮れ時。バスの窓から見える風景は、少しだけ物悲しい夕陽の色に染まっていた。

「アサトは私を子供扱いしすぎだよ」

黒髪のポニーテールを揺らし、少し吊り目がちなだいたい橙色の瞳の少女が、不満げに言う。  
流遠るとおやみひめ。

つい二日前に「機獣少女」と呼ばれる存在に出会ってしまった、それ以外は普通の小学六年生の女の子。

「小学生は子供だ。子供はお家に帰る時間だろ？」

やみひめの言葉にけだる気怠い調子で答えたのは、彼女の一つ後ろの席の窓際に座った、男性にしては少し長めの黒髪の少年だ。

たちばな  
橘 アサト。

夏に、とあるきっかけでやみひめが出逢った高校三年生にして、彼女の想い人である。

昨今の若者には珍しくないが、アサトの表情や口調には覇気がなく、面倒くさそうな雰囲気にじが滲み出ている。彼にしてみれば、休日に小学生に呼び出されたのだから、当然と言えば当然の態度なのかもしれない。

「もうすぐ中学生だもん。セーラー服だよ？ ドキドキするでしょ？」

中学校に上がるのが楽しみなのか、やみひめの言葉は楽しげだ。

「制服には興味ないし、やみ子の制服姿にも興味ない」

対して、アサトの反応はつれない。ちなみに、『やみ子』というのはやみひめの事である。

アサト曰く『姫なんておこがましい。やみ子で充分』だそうだ。

「やみ子じゃなくて、ちゃんと呼んでよ」

「絶対に呼ばない」

「もう！ アサトの馬鹿！ 意地悪！ ダメ人間！ えーつと……馬鹿！」

「ふん、ボキャブラリー語彙のない奴め。しょせん、やみ子だな」

何度かそんな会話が繰り返された後、やみひめはもう一人の連れが静かな事に気付いた。やみひめの右隣では、彼女と同じ歳ぐらいの少女が、流れていく街並みを眺めている。

セミロングの黒髪を左側のサイドポニーにしており、青く澄んだ瞳は蒼玉サファイヤのようだ。

ツバキ・タカチホ。

ここでは高千穂ツバキという事になっている、惑星ゼヘナから来た異邦人。年齢はやみひめより一つ下の小学五年生。大人びているのは雰囲気だけでなく、彼女の胸元で自己主張している豊かな膨らみもだ。言葉を選ばず言うと『ロリ巨乳』である。本人はコンプレックスに感じているようだが……なんというか、性格を含め、色々とアンバランスな少女である。

もうすぐ九月も終わりだ。六時を過ぎると、すぐに暗くなってしまう。せっかく街まで出たので、やみひめはツバキやアサトと一緒に、もつと遊びたがったが、『お前らに何かあったら俺が怒られる』とアサトに一蹴されてしまった。

そういう理由で、今は市街地から住宅地に向かうバスの中である。

「ツバキ、何か気になるの？」

思うところでもあるのか、ツバキの表情が珍しさとで風景を眺めているだけに見えなかったやみひめは、そう訊ねた。

「——あ、いえ。そういう訳では」

いつも浮かべている柔らかな澄まし顔でツバキが答える。その表情は本当に何でもないように思えるのだが、それはツバキが本心を隠すためのポーカーフェイスなのではないかと、やみひめは気になった。

「本当に？ 言いたくない事だったら言わなくていいけど、ツバキの事情を知ってるのは私だけだから、言いにくい事でも遠慮しないでいいんだよ？」

やみひめの言葉に、ツバキは一瞬だが、きよんとした表情を浮かべた。

「ツバキは一人で抱え込んだタイプに見えるから……あ、お節介だったらごめんね」

やみひめが苦笑気味に言うと、ツバキは首を横に振った。

「……ありがとうございます」

「え？」

「やみひめさんの言う通りです。私は人を頼るのが苦手です。人に頼むくらいなら、自分でやってしまった方が気楽ですから」

人に迷惑を掛けるのが嫌なんです——ツバキはそう言って苦笑を浮かべた。

まだだ。(カタストロ)との決着は自分で付けると言った時の顔。こんな顔をさせたくないくて、やみひめはツバキに協力しようと思った。

だから——

「私はツバキにだったら迷惑を掛けられてもいいし、迷惑だなんて感じないかもしれない」  
言葉だけなら何とでも言える。だけど、言葉にしなくては何も伝わらない。

「誰だって誰かに迷惑を掛けてるよ。それは仕方ない事だと思う」

そう、生きていれば必ず他人と衝突する。利害の不一致や意見の違いが生まれる。集団を形成する上で、それは避けられない。

「だから、迷惑を掛けたら許してもらおうしかないと思う。謝って済まない事もあるけど、その分、他の誰かに迷惑を掛けられた時に許してあげたり……そうすれば、皆が皆を許せれば、迷惑を掛けたり掛けられたりするの、仕方ないって思えるかもしれない」

「……………」

「ごめんね。上手く言えないや」

ツバキの無言を理解出来ないと受け取って、やみひめは申し訳なきうづむに俯いた。わずかな沈黙が生まれる。バスの駆動音がやけにはつきり聴こえる。

「—やみひめさんは、すごいですね」

「え…………？」

思わぬツバキの言葉に、やみひめは俯けていた顔を上げた。

「私はそんな風に考えた事がありませんでした。迷惑を掛けたら嫌われる。許してもらえないはずがない。だから、出来るだけ人と関わらないように生きてきました」

人に嫌われるのは怖いから——そうツバキは言った。

「でも…………そうですね。誰もがそんな風に考えられれば、もっと優しい世界になるかもしれません」

「ツバキ…………」

「——まあ、理想論だけだな」

と、やみひめとツバキの会話に割り込んだのはアサトだ。

「橘さん？」

「そんな寛容な人間は一握りだ。それに、そんな『いいひと』は都合良く利用される。お人好<sup>よ</sup>しって言われて馬鹿を見るだけだ」

ツバキが振り返ると、真後ろの席のアサトが、彼女と視線は合わせずに窓の方を向いて言った。風景を見ている訳ではないだろう。自分でも嫌な事を言っていると判っている——

—そんな顔だ。

「橘さんは私と同じ側の人間ですね。私もそう思います」

苦笑を浮かべて、「でも」とツバキは続ける。

「私はやみひめさんの考えの方が好きです。そう思える人間になりたいです」

アサトは窓の外に向けていた視線をツバキと合わせると、じっと彼女を見つめた。

「…………そうか」

「はい」

「…………そうだな。その方がいい」

「…………はい」

<sup>けだる</sup>気怠い表情に少しだけ優しい笑みを浮かべて言うアサトに、ツバキも少し照れたような笑みを浮かべて答えた。

「えつと…………」

なんとなく蚊帳の外に置かれたようで、やみひめが少し戸惑う。これは丸く収まったと見ていいのだろうか？

そうこうしていると次の停留所を告げる車内アナウンスが流れた。

「あ——次だよ、ツバキ。降りる準備してね」

「判りました」

とはいえ、荷物はほぼアサトが持っているので、少女達は手鞆のみだが。

「——やみひめさん」

「うん。なに？」

「帰ったら、聞いてほしい事があります」

「！ うん、いいよ！ 何でも聞くよ！」

先ほどの会話の後だけに、やみひめはツバキが自分を頼ってくれるのが嬉しかった。思わずテンションが上がってしまい、アサトに声がかいと注意されるくらいに。

第五話

『機獣少女の問題』

バスを降りて、アサトは家の前まで買い物袋を運んでくれた。お札に晩御飯に誘ったけど、『なんで親御さんに挨拶あいさつせにやならんのだ』って言って帰ってしまった。お父さんはアサトに会った事がないから、一度お札を言いたいつて言ってるんだけど……あれ？ 親御さんに挨拶あいさつって、『娘さんを僕にください』とか、そういう意味!？」

『——やみひめよ、何をニヤニヤしておるのだ。嫁入り前の娘が他人に見せてよい表情ではないぞ?』

私がアサトの言葉の意味を考えて妄想——ううん、色々な想像をしていると、急にスピーカーを通してような女性の声が聞こえた。それはテーブルの上に置かれたスタンド——というか写真立て——に掛けられたネックレスから発せられている。紐に繋がっているのは黒い勾玉まがたまで、それは〈機獣少女〉に変身するために必要なMBデバイス〈カグツチ〉だ。ツバキのパートナーで、今は私を仮の契約者として力を貸してくれている。

「え!? 私、そんな変な顔してた?」

『変ではないが、私その顔を写真にでも撮られて公開されたなら、二度と素顔で表を歩けぬだろうな』

少し時代がかった口調はいつも通りだけど、言葉を選んできるといふか、気を遣ってくれてる感が伝わってくる。

「……お願い。忘れて」

『安心するがよい。間違っても、先ほどの其方そなたの醜態しゅうたいを高画質モードで動画に記録などしておらんぞ?』

「したの!?! お願いだから消して!?!」

どんな顔をしたのかは判らないけど、二度と素顔で表を歩けなくなるのは困る。

『冗談だ。私の記憶に留めるだけにしておく』

「えっと……それって記録するのは違うの?」

『いや? 意味合いとしては同じだ』

「駄目えええ——ッ!」

私が悲鳴を上げて待機状態の黒い勾玉を上下に揺るけど、〈カグツチ〉は愉快そうに笑うだけだ。MBデバイスがどんなものなのか、私はあまり把握出来てないけど、ただの機械とか人工知能とは違うんだと思う。こんな風に冗談——だと思いたい——を言ったり、私やツバキを心配したりもしてくれるから。

「……ねえ、〈カグツチ〉。MBデバイスって、どういうものなの」



『昨日、ツバキが説明した通りだ。〈機獣少女システム〉を効率よく使用するためのデバイス——それが私だ』

「うん、それは聞いたけど……もつと具体的に教えてほしくて。駄目、かな？」

『それは好奇心か？』

「うん。だから、訊いちやいけない事なら訊かないよ」

なんとなくだけど、そんな気もしていた。だから、教えられないと言われても落胆はしないつもりで訊いた。

『そうか。別に機密の類たぐいではないからな。知りたいのであれば教えよう』

〈カグツチ〉曰く、〈機獣少女システム〉の根幹を成す機獣きじゅうの中枢部——通称・MBコアの欠片かけらが納められているのがMBデバイスらしい。MBコアは巨大で大出力だから、手のひらサイズの欠片でも、十分に〈機獣少女〉の戦装束であるMBジャケットや、その他のシステムを維持出来るそうだ。

「じゃあ、〈カグツチ〉は機獣なの？」

『機獣』——それはツバキのいた惑星ゼヘナに生息する巨大な金属生命体で、今は発電施設である〈ジェネレーター〉に組み込まれているか、コアの状態で眠りに就いていると聞いている。

『そうなるな』

「？」

なんだろう。〈カグツチ〉の言葉が少し引っかかった。自分の事なのに、他人事みたいな言い方に聞こえる。

『実を言うと、私は自分がどのような機獣だったのか覚えておらんのだ』

「どういう事？」

『休眠状態だった私のコアは、再起動する際のトラブルで記憶装置メモリーが不調を起こしてしまつてな。外部の記録も残つてはおらず、故に私は自分の過去を覚えておらんのだ』

悪い事を訊いてしまったかとも思つたけど、〈カグツチ〉の口調に悲壮感はない。そう装つてるだけかもしれないけど、だったら、ここで私が謝ると逆に気を遣わせてしまうかもしれない。だから私は、「そうなんだ」となるべく普通に答えた。

『しかし、其方そなたの〈機獣少女〉姿の際に現れる耳と尻尾は狼のものだ。恐らく、私は狼型の機獣だったのだから』

「あー、あれか……」

〈機獣少女〉になると生える耳と尻尾。確かにあれはテレビや図鑑で見た事のある狼のそれに似てる。

『もつとも、記憶などなくとも問題はないがな』

「そうなの？ 記憶喪失みたいなものじゃないの……？」

この話題を続けるべきか悩んだけど、本人が気にしてなさそうなのに話題を変えると、むしろ気まずくなりそうだったから。

『ふむ。私と其方そなたはこうして会話をしているが、私のように人格と呼べるほどの自我を持った機獣は稀まれだ。名前の通り、我々は機械の獣。故に、本来は人間のような人格を持たない』

「うん？」

〈カグツチ〉の言っている事と、今までの会話の流れが繋がらなくて、変な返事が出た。まった。

『つまりだ。其方は私が人間のように思っているかもしれぬが、まったく違う存在なのだ。人間の尺度を当てはめる事に意味などない』

「人間じゃないから、過去にこだわらないって事？」

『そういう事だ』

〈カグツチ〉は事もなげに言いきった。

『それに、私が休眠状態に入り、確実に半世紀は経過している。かつての私の主あるじは、すでに他界しておるだろう。ならば、下手に覚えておらぬ方がよい』

主……つまり機獣だった頃の〈カグツチ〉のパートナーだった人。それがどんな関係性なのかは想像するしか出来ないけど、〈カグツチ〉の口から出た『主』という言葉には、愛しさをみたいなものを感じた。

目が覚めたら大事な人がなくなってる世界っていうのは、悲しいと思う。なら、〈カグツチ〉の言う通り、覚えてない方が幸せなのかな……。

『——やみひめ？ どうしたのだ、突然？』

何かに気付いたように、〈カグツチ〉が珍しくうろたえたような声で言った。

「え、何が？」

訳が判らず訊き返す。

『……其方なにゆえ、何故泣いておるのだ？』

「え？ 泣いてなんてないよ？ 何言って……あれ？」

目頭が熱い。視界が滲にじんで、頬に温かいものが伝ってる。

これは涙だ。

私は無意識に泣いていた。

「あれ？ なんてだろう？ 私の事じゃないのに……」

そうだ。私の事じゃない。(カグツチ)が気にしてないと言ってるのに、私が泣くのはおかしい。

でも、なんか、そんなのって――

「だけど、そんなのって、悲しいよ……!」

私の中の何かが痛む。心を締め付けられるような、切ない痛み。

夏の事件の後、病院での再会を経て、あの公園でもう一度アサトを見つけた時の感覚が蘇える。あの時も言い知れぬ感覚に襲われた。

そして、気付けばアサトの胸に飛び込んでいた。

私を受け止めてくれた手は優しく、それだけで、もう何も要らないと思えた。

でも、(カグツチ)を受け止めてくれる人はもういなくて。

それはすごく悲しくて。

そう思うと――

「う……ううっ……ひっく……うああああああああああああああああああん」

嗚咽おえつが止まらない。

涙がとめどなく溢れてくる。

悲しみが私の中で広がっていく。



「落ち着きました?」

優しい声でそう言い、私の頭を撫なでてくれているのはツバキだ。お風呂上がりのためか、肌はほかほかして、ほんのりとシャンプーの香りがする。本当は一緒に入りたかったけど、

一昨日おとといの前科があるからか、恥ずかしがって断られた。だから私が先に――後だと侵入される危険がある――入って、一足先に部屋にいたんだけど……。

「うん……ごめんね、びっくりしたでしょ?」

「いえ。急な体調不良たぐいの類たぐいでなくて安心しました」

そう。(カグツチ)の記憶がないという話を聞いて、私が泣いてしまった。部屋に来た時のツバキの慌あわてようは、泣いていた私が少しだけ冷静さを取り戻すくらいだった。

『驚いたのは私だ。何事かと思っただぞ』

「(カグツチ)もごめんね。私、訳が判らなくなっ……」

私を心配してくれたのは(カグツチ)も同じだ。ツバキが慌あわてて駆けつけてくれたのも、(カグツチ)が念話でツバキを呼んでくれたから。(カグツチ)は自分を人間じゃないって

言ったけど、私から見れば充分に人間っぽいと思う。

「さて——落ち着いたのであれば、やみひめさんは離れてください。さりげなく私の胸に顔を埋め<sup>うず</sup>ないでください」

バレてる。しかも、いつもの丁寧な口調なのに、心なしか、怒っているように聞こえる。

けど、ツバキのふくよかな胸の感触は同性の私でも魅了されてしまう。別にえっちな意味じゃなくて、お母さんみたいで安心する。

「……何か今、不本意な表現をされた気がします」

鋭い。でも、お母さんみたいって嫌なのかな？

「えへへ。もう大丈夫だから。ありがとう、心配してくれて」

そうやって私はツバキから離れた。ちよつと名残惜しかったけど、また胸の事に触れてツバキに怒られたくないし。

「……本当に心配しましたよ。やみひめさんはゼヘナの人間ではないんですから、変身の悪影響があるかもしれませんし、〈カタストロ〉との戦闘の後遺症が今になって現れたのではないかとか、不安要素はいくらでもあるんですから」

ツバキの口調と表情は至って真面目で、私を脅<sup>おど</sup>かして反省させようとかではなく、本気で不安に思ってくれているんだと判った。

「大丈夫だよ。私は自分も家族も友達も大事だから、悲しませるような事はしないよ」

「……………」

「どうしたの、ツバキ？」

「……いえ、やみひめさんは護るべき対象に自分が含まれています。それが少し、羨<sup>うらや</sup>ましくて——」

語尾を濁して困り顔を浮かべるツバキ。

そういえば、ツバキは自分を犠牲にして〈カタストロ〉から私を逃がそうとしてくれた。

あれは〈機獣少女〉の使命感や責任感からだと思っただけど、ツバキは特撮やアニメのヒーローじゃない。自分を犠牲にしてまで他人を助ける人間なんて、普通はいない。いるとしたら、それは——

「ツバキは……自分が大切じゃないの？」

誰だっけ自分が一番可愛い。死にたくない。

それが普通だと思っ。

そうじゃないとしたら、その人は自分が好きじゃなくて、死んでもいいと思ってるんじゃないかと考えてしまった。

「……自分の命を粗末にするつもりはありません。ですが、自分が大切かと問われれば、

よく判らないんです」

そう言うツバキの表情は、普段の大人びた澄まし顔じゃなくて、何かをあきらめてしまった大人みみたいだ。

「私は空っぽな人間なんです。戦う理由はあっても、それは自分や特定の誰かのためじゃない。ただ、私が戦う事で救える人達がいる。そんな漠然とした自己満足で戦っているだけなんです」

淡々とツバキは語る。まるで独り言みたいに。

「昔、私に『幸せになれ』と言ってくれた人がいました。だから、私は生きて幸せにならないといけない——でも、それはそう言われたからなんです」

ツバキの顔は少し俯うつむき気味で、じっと一点を見つめている。

「私にはやりたい事がなくて。なりたいたいものもなくて。生きているのも、そう望んでくれた人がいたからで」

なんとなくだけど、その人はもうツバキの傍そばにいないんだと思う。

「もしかしたら、私は死に場所を求めているのかもしれませんが。ただ死ぬのは卑怯な気がして、だったら納得のいく死に方をしたい。戦って死ねば、褒めてもらえるかもしれない。『がんばったね』と、言ってもらえるかもしれない」

多分、本当にそう言ってほしい人はもういない。だから、ツバキの願いは叶わない。

「やはり、私は自分を大切だと思っていないのかもしれませんが。死に方は選ぶけど、生き方は選べないような人間ですから」

顔を上げ、困ったような笑顔でツバキは言った。その笑顔は……すごく痛々しい。

「つまらない話をしてしまいましたね。それより、やみひめさんはどうして泣いていたんですか？ 何か異常があるのでしたら、〈カグツチ〉に走査スキャンしてもらった方が……」

ツバキは自分の話をあっさり切り上げ、私の心配をしてくれる。それは嬉しいけど、今までの話を聞いた後だと、逆に不安になる。自分の事がどうでもいいから、他人を気遣えるんじゃないかって。

「……ねえ、ツバキ」

「はい？」

「私はツバキじゃないから、ツバキの気持ちは判らない。でもね、ツバキが私を心配してくれるみたいに、私もツバキが心配。まだ会ったばかりだけど、私はツバキの事、好きだから」

出会ってまだ二日しか経ってない。でも、すごく密度の濃い時間だった。ツバキの優しいところも、可愛いところも、弱いところも見た。

「ツバキが死んだら悲しいよ。私は『がんばったね』なんて言わない。なんで死んじゃったのって、責めると思う。ツバキはそれでもいい?」

意地悪な言い方だけど、他に言葉が浮かばない。

「それは……嫌です」

「だったら、絶対に死んじゃ駄目。ツバキは良い子だから、生きてればきっと幸せになれるよ。こんなに優しくして、可愛いし、強いんだから」

無責任な事を言ってると思う。本心だけど、それで幸せになれる根拠も保証もない。これはツバキに幸せになって欲しいという私の勝手な願望だ。

だけど、こんな良い子が幸せになれない世界は間違ってる。そんな理不尽なのが世界なら、ツバキが命を懸けてまで護る価値なんてないと思う。

「でも、私は空っぽで……」

「空っぽなんかじゃないよ。ツバキは優しくして、可愛くて、強い女の子だよ。空っぽだと思うなら、今から埋めていけばいいよ。また一緒に買い物に行ったり、遊んだり、楽しい事いっぱいしよう?」

空っぽなら、それだけたくさん思い出が詰め込める。楽しい事ばかりじゃないかもしれない。それでも、たくさん詰め込めば、楽しい事も増えるはずだから。



「落ち着いた?」

優しくそう言ってくれて、私はツバキの頭を撫でる。さっきとは立場が逆転していた。

あの後、今度はツバキが大泣きして大変だった。昨日も泣かせてしまったし、もしかしたら、ツバキは意外と涙もろいのかもかもしれない。もしくは普段は絶対に泣かなくて、その反動とか。

どっちにしても、歳下の女の子が泣いているのを見るのは心が痛い。でも、これでツバキが空っぽなんかじゃないって改めて判った。本当に空っぽなら、あんな風に泣いたりしないもの。

感じる心があるんだから、ツバキは空っぽじゃない。

「……はい。やみひめさんには泣かされてばかりです」

ツバキが少しだけ不貞腐れたような顔で言った。

「そうだね。ごめんね」

本気で言ってるんじゃないって判ってるから、私は悪びれずに謝った。

「反省が感じられません。もっと誠意を見せてください」

「うーん……土下座とか？」

「本気で反省をしている人は土下座なんてしません」

もちろん冗談のつもりで言ったんだけど、ゼーナにも土下座があるみたい。『ツバキ』って名前もそうだけど、ツバキの住んでる場所の文化は日本に近いのかもしれない。

それから、他愛のない話をして、私が泣いていた理由が（カグツチ）の記憶に関する事だと話した。現在のパートナーであるツバキは当然だけど知ってて、その件には触れないのが暗黙のルールになっているらしい。ゼーナの事も機獣の事も知らない私は、とりあえずだけど、それに倣う事にした。

「そういえば帰りのバスで、私に聞いてほしい事があるって言ってたよね？」

空気も元に戻り、ちょうど会話が一区切りしたので、私は気になっていた事を訊いた。

「はい。今日、この国の街並みを見て思った事があるんです」

ツバキも異論はないみたいで、話に乗ってくれた。

「気を悪くせずに聞いてほしいのですが——この国、もしくはこの近辺は、世界的に見て田舎いなかだとか、技術的に遅れているという事はありますか？」

「え？ うーん……日本は先進国って言われてるし、家電とか娯楽の技術はかなり高いはずだよ。この辺りは主要都市って訳じゃないけど、田舎じゃないと思う。多分、普通の地方都市だよ」

「では、民間には普及していない技術や資源はありますか？ 軍隊などの国家機関が、高度な技術は秘匿しているとか」

「私はミリタリーは詳しくないけど、少なくとも魔法みたいな技術や、アニメみたいな超兵器はないよ。戦闘機も戦車も、私から見れば戦うための飛行機や車くらいの感覚だし。発電所や病院だって、びっくりするような技術はないと思う。仕組みとかは全然判らないけどね」

確かにすごい技術はたくさんある。先進国とそうじゃない国で技術力や経済力に差はある。けど、日本国内に関しては民間と公的機関で技術の差とかを感じた事はない。

「そうですか……」

ツバキは何か納得がいかないというか、釈然としない表情をしてる。

「何が気になるの？」

ツバキの質問の意図が判らず、私はそんな疑問をぶつけた。

「以前、ここは地球なのかと訊たずねた事がありましたよね」

「うん。初めて会った時だよね」

「では、別の星——ゼヘナから来た私が地球を知っているのを、不思議に思いませんか？」  
「あ、そういえば……」

私は当然、惑星ゼヘナなんて知らなかったし、地球以外に生き物がいる星も知らない。普通に考えれば、一方的にゼヘナの人だけが地球を知ってるのはおかしい。

「実は、ゼヘナには大昔、地球人が訪れているんです」

「え……？」

ツバキの発言に驚く。だって、地球人は月まで行くのがやっとで、別の惑星まで行けるような宇宙船なんてない。

ツバキの話によると、大昔に地球の宇宙船がゼヘナに不時着して、乗り込んでいた地球人はそのまま定住したらしい。現在のゼヘナの人間は地球人との混血で、ツバキの住んでる『東方大陸』では日本の文化の影響が強いそうだ。確かにツバキや〈カグツチ〉の名前は日本っぽいし、〈機獣少女〉のMBジャケットもデザインは和服に近い。土下座なんて言葉を知ってるのも、これで納得出来る。

「……でも、おかしいよ。地球には別の星まで行く技術なんてないし、地球人が来たのは大昔の話なんですよ？ もっと無理だよ」

「そうなんです。今日、この国の街並みを見て、ゼヘナより高度な技術力があるようには思えません。だから気になったのですが——〈カグツチ〉、どう思いますか？」

ツバキが机の上で待機状態になっている〈カグツチ〉に訊ねた。

『ふむ。可能性を挙げてみようか。一つ目——ここが偶然地球という名前の星で、偶然地球と同じような環境で、偶然人間型の生物がいた。偶然説だ』

「ありえませんが、それだけ重ければ、もう偶然ではありません」

ツバキの言う通りだ。それはもう必然で、誰かが仕組んだ事になる。そんな事が出来るとしたら神様だけど、それこそありえない。

『そうだな。二つ目——我々はゼヘナから地球へ転移したが、実は場所だけでなく、時間も跳び超えてしまい過去の地球に来てしまった。タイムスリップ説だ』

「ありえない……とは言い切れませんが、瞬間移動の時点で非常識なんです。それが可能なら、時間移動も不可能ではないかもしれません」

ゼヘナにも転移技術はないと、以前にツバキが言っていた。地球でもSFだし、タイムマシンなんて、それこそ古典SFだ。

『二つ目——ここは我々の世界とは異なる歴史を辿った地球である。並行世界説だ』

並行世界は私も知ってる。現実から枝分かれした可能性の世界の事だ。例えば、私が夏の事件に遭わず、アサトに助けられなければ、公園でツバキに出会う事もなかったかもしれ



れない。そういう可能性の世界の事。これもSF作品では有名だと思う。

「……パラレルワールドですか。いよいよSFですね」

『私も本気で言っている訳ではない。あくまで可能性の話だ』

ツバキが少しだけ呆れたような顔をしてる。ツバキは現実的な性格っぽいから、こういう非常識な話には抵抗があるのかもしれない。

この後、〈カグツチ〉は他にも色々な可能性を挙げた。中には、これは壮大な仕込みで、実はここはゼヘナだというドッキリ説もあった。これには私も苦笑した。

「どれもありえませんが、もともと可能性が高いのはタイムスリップ説と並行世界説ですか……頭が痛くなってきました」

ツバキはロダンの『考える人』みたいなポーズになってる。やっぱり、非常識な事は苦手みたいだ。私にしてみれば〈機獣少女〉や〈カタストロ〉も非常識なんだけど、ゼヘナでは当たり前なんだよね。

けど、並行世界か……。

「ここが並行世界だった場合、本来の世界もあるんだよね？　そこでの私って、どうなってるのかな」

「やみひめさん、あくまで可能性の話です。それに、私達にとってここは並行世界ですが、やみひめさんから見れば、私達の世界が並行世界になるんですよ。いえ、それも本当にここが並行世界であればの話で……もう、言っていて訳が判らなくなってきました」

ツバキが頭を抱えてる。泣き顔も見ただけど、普段は澄まし顔が多いから、ツバキには悪いけど、見ていてちよつとだけ面白い。

『——其方があのアサトという少年と同じ歳で、仲睦まじく並んでいる世界もあるやもしれんな』

思いついたみたいに〈カグツチ〉が言った言葉が、妙に私の耳には大きく聞こえた。

可能性の話なんだから、そういう妄想で盛り上がりたつてもいいはずなのに、私は上手くリアクションを返せず、不自然な苦笑いしか出来なかった。

なぜだろう。

そんなのは並行世界でしかありえない——〈カグツチ〉にそんなつもりはないはずなのに、私はそう言われたような気がしてしまったのかもしれない。

アサトと普通に並べる世界。

同じ目線で、同じ立場で、一緒にいられる世界。

それは本来の世界ではありえない……？

「——やみひめさん？ どうかしたんですか？ 顔色が優れないようですが……」

「え？ ううん、大丈夫だよ。どうもしてない」

心配そうに私を気遣ってくれるツバキに、笑顔で答えたつもりだったけど、出来ていたかどうかはちよつと自信がない。

「そうですか？ ならいいのですが……」

やっぱり上手く笑えてなかったみたい。ツバキは少しも安心しているようには見えなかったから。

『……この話はここまですておこう。どうやって地球に来たかもそうだが、我々が話し合っても答えは出まい。夜も更けてきたしな』

「そうだね。明日から学校だし、もう寝なきゃ」

〈カグツチ〉の提案が助け船に思えた。

考えても仕方ない事もある。現実逃避だって悪い事ばかりじゃないと思うし、私は普通の小学生だから、学校も大事だし。

〈カタストロ〉の事。ツバキ達の事。

学校の事。アサトの事。

普通じゃない問題と普通の小学生の問題。

どっちも、ちゃんとなんとかしないと。

だって——自分で〈機獣少女〉になったんだから。

## あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第五話をお届け致します。

えーつと……予定が変わりました。

本当は今回の内容をアバンでやって、本編はやみ子の登校シーンから始まるはずだったんですが……結果はご覧の通りです。よくある事ですが、一つ一つのシーンが膨らんでしまい、一話分の長さになりました。

なので、まだ日曜日です。金曜日から始まったので、まだ二日しか経っていません。次回は本当に月曜日です。

ツバキとは違う大人びた『あの子』もちゃんと登場しますので、お待ちください。

今回は特に補足もないので、早いですが謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

新年一発目の『ゾイやみ』でしたが、今年もこういう方向性です。願わくば、完結までお付き合いいただけますように。可愛いロリ達を書けるようにがんばりますので。

——ああ嗚呼、うすロリ巨乳の胸に顔を埋めてな撫で撫でされたい。

2015 / 1 / 12 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る